

Non-eventive nominal について

加 藤 主 税

Remarks on Non-eventive Nominals

Chikara KATOH

drawing は次の3種の意味を有する。

- (1) 書くという事実 (2) 書き方 (3) 書いたもの

上記のうち、(1)と(2)はそれぞれ gerundive nominal, action nominal と呼ばれているもので、ここではまとめて eventive nominal と命名し、(3)を non-eventive nominal とする。この eventive—non-eventive の区別は derived nominal にも存在し、さらに名詞、動詞両用のものにまで、この non-eventive nominal の概念を拡大適用する。そして、結局 1. gerund, 2. derived nominal, 3. nouns from verbs, 4. verbs from nouns の4種における non-eventive nominal を verb — eventive nominal — non-eventive nominal の系列を基として、考察を進める。さらに verb と non-eventive nominal の関係を論じ、以下のように3種のタイプの存在を確認する。

タイプ A non-eventive nominal (x) = something that someone verb (x)

タイプ B non-eventive nominal (x) = some thing that someone verb (x) with

タイプ C non-eventive nominal (x) = something that verb (x)

タイプAは non-eventive が他動詞の目的語になっている場合であり、タイプBは、元の動詞といわゆる助格の関係にあるものでありタイプCは自動詞の主語の関係に相当するものである。これら3種のタイプは、上記4種の nominal にすべて適応するだけでなく、種々の制約がある。たとえば、タイプAは、4種のすべての nominal に適応するのでこれを基本的なタイプとする。タイプBは verbs from nouns の場合だけでなく、タイプCは gerund と nouns from verbs の場合だけにあてはまる。

1. 序 Gerund

(1)のhis writingは(2)(3)(4)の3通りにあいまいである。

- (1) I am surprised at his writing.
 (2) the fact that he wrote something
 (3) the manner that he wrote something
 (4) what he wrote

Fraser(1970)は(2)のように解釈できるものを gerundive nominal, (3)をaction nominal と呼び、意味上の差異として(5), (6)をあげている。

- (5) gerundive nominal は事実を表わす。
 (6) action nominal は様態、方法などを表わす。

また統語的には、主なものだけをあげれば、次の(7)(8)(9)(10)(11)(12)のような特徴を有する。

- (7) gerundive nominal は意味上の主語として(代)名詞の所有形を持たねばならない。
 (8) action nominal は冠詞を持つことができる。
 (9) gerundive nominal は意味上の目的語を直接持つことができるが、action nominal は目的語の前に of を伴わなければならない。
 (10) gerundive nominal は副詞的修飾語句をとるが、action nominal は形容詞的修飾語句をとる。
 (11) gerundive nominal は完了形、受身形を作ることができるが、action nominal はできない。
 (12) すべての動詞が gerundive nominal になること

ができるが、action nominal になることのできる動詞は限られている。たとえば、状態動詞は action nominal になることができない。

このような統語上の特徴からすれば、(1)の his writing を his writing the letter とすれば(2)の解釈になり、his writing of the letter とすれば、(3)の解釈になり、あいまい性は消滅する。(この場合は(9)の性質による。)

Chomsky(1970) は action nominal のことを mixed form と呼び、Wasow and Roeper(1972)は gerundive nominal を verbal gerund, action nominal を

nominal gerund と呼んでいる。呼び名はそれぞれ異なっても、同じものを指しているようである。gerund は日本語の「動名詞」という用語からもわかるように、動詞と名詞の間のものであり、動詞と名詞の2つの機能を持つのであるが、その gerund は動詞に近いもの gerundive nominal と名詞に近いもの action nominal の2種に、統語的にも意味的にも、明確に区別されている。上記の Fraser (1970), Chomsky (1970) を含めて諸々の学者の用語を次の(13)にまとめる。

(13)

	(2) の 解 釈	(3) の 解 釈
Chomsky (1970)	gerundive nominal	mixed form
Lees(1960), Thomas(1965) Newmeyer(1970), Fraser(1970)	gerundive nominal	action nominal
Wasow and Roeper(1972) Thompson(1973)	verbal gerund	nominal gerund
安井 (1974)	動詞的動名詞	名詞的動名詞

Chomsky(1970) の mixed form という命名法は、それが、gerundive nominal と derived nominal の中間形であることに帰因し、Lees(1960), Fraser(1970)などの action nominal は、それが、gerundive nominal とは異なり、主に action を表す動詞のみが、名詞化でき、状態動詞は、それができないということに由来する。また、Wasow and Roeper (1972), Thompson (1973), 安井 (1974) は、統語的に見て、前者は動詞に近い動名詞であり、後者は名詞に近い動名詞であるということに基づいて、命名した。なお nominalization についてのこれらの論考はほとんどが Chomsky(1970) が発端になったが) いわゆる lexicalist position と transformationalist position との論争に関係している。gerundive nominal は基底構造にSがあり変形によって派生されるということについては問題はないが、derived nominalの扱いについて、意見が2つに分かれている。Lakoff (1970), Ross (1967), Lees (1960) など transformationalist position では、derived nominal も gerundive nominal と同様に、基底構造Sから変形によって派生されると考えているが、Chomsky (1970) などの lexicalist position では、derived nominal は gerundive nominal とは異なり、基底にSを持っていないで、変形によらずに、基底構造から直接派生される。つまり元来からの名詞句として分析して

いる。

これで(1)の his writingの2通りのあいまい性について、種々の説を紹介したが、3番目の解釈、つまり(4)の意味については、どう説明したらよいであろうか。(2)(3)のものとは全く異なるのであろうか。事実、意味的にも統語的にも(2)(3)の意味とは差がありすぎるので、上記の nominalization に関する研究は、すべて(4)を除外している。故に(4)は(2)(3)とは形態上は似ていても、関係はなく、したがって、元の動詞とはつながりが切れて、独立の単語として考えられている。しかし、形態が同一であるということと、ほとんどすべての基本的な gerund の形がこの(4)のような意味を持ち得るということを考えれば、(4)も(2)(3)と同様に元来の動詞からの nominal の一種として、市民権を与えられてもよいのではないか。もしそうすれば、英語を分析するのにどんな利点があるのか。この小論はこのような利点の可能性にスポットを当てることを目的とするものである。(2)(3)と(4)の区別を eventive という観点で捉え、(2)(3)をまとめて eventive nominal, (4)を non-eventive nominal と呼ぶことにする。eventiveは「コト」を意味し、non-eventiveとは「モノ」を意味する。たとえば her white faceが「彼女の白い顔」という意味の場合には、「モノ」的な意味を持つ名詞句、つまり non-eventive NP と呼び、これが「彼女の顔が白いこと」という意味になる場合に

は、「コト」的な意味の名詞句, eventive NPと呼ぶ。毛利(1962)によれば、前者は吸収が行なわれていない本来の「モノ」表現であり、後者は主辞吸収した結果生じた表現であるという。eventive についての詳細は拙論(1976),(1977)を参照されたい。

2. Derived nominal における non-eventive nominal

上記 gerundive nominal と action nominal および, non-eventive nominal に平行した用法が, derived nominal にも見られる。

(14) His knowledge pleased his mother.

(14) の his knowledge は次の(15)(16)(17)のように3通りの解釈が可能である。

(15) the fact that he knew something

(16) the extent that he knew something

(17) what he knew

(15)と(16)の差異は、上記 gerundive nominal と action nominal の差と平行的であるように思われるが、このことについて言及している研究はない。(15)(16)は統語的には、差異はない。しかし意味上、(15)(16)のように差があるのである。(16)に関して、元の動詞が状態動詞の場合(たとえば know)には extent, 非状態動詞の場合(たとえば describe)には manner の意味を持つように思われる。たとえば description の場合は describe が非状態動詞であるので、manner の意味になる。次の(18)(19)(20)(21)は(14)(15)(16)(17)と平行的であり、manner の意味を持っていることを示す。

(18) his description

(19) the fact that he described something

(20) the manner that he described something

(21) what he described

derived nominalのこれらの用法において、gerundive nominal, action nominal の場合と同様に、上述の(15)(16)、および(19)(20)は「コト」を表わすので eventive nominal とし、(17)(21)は「モノ」を表わすので non-eventive nominal とする。derived nominal は基本的なものはほとんど non-eventive の意味を持ち得る。このことも non-eventive nominal を nominalization の一種に加えられる1つの根拠をなすと思われる。

3. Non-eventive nominal の種類

これまで、我々は2種類の non-eventive nominal を考察してきた。つまり gerund と derived nominal である。1. 動詞 2. eventive nominal (これは既述のように gerundive nominal と action nominal を含む)、3. non-eventive nominal の系列を write,

know を例にしてまとめると(22)(23)になる。

(22) 1. write—2. writing—3. writing

(23) 1. know—2. knowing—3. knowledge

ところが、動詞を gerund の形にも derived nominal の形にもしないで、名詞として用いられるものがある。またその反対に、本来の名詞が、語形変化しないで、そのまま動詞として機能するものもある。Jespersen(1909—1949)はこれを naked word として扱っているし、Kruisinga(1932)は conversion の1種として扱っている。これも同様に1. 動詞, 2. eventive nominal, 3. non-eventive nominal の系列を作ると、(24)(25)になる。(24)は本来が動詞で名詞にも転用できるもので、(25)は本来が名詞で動詞にも転用できるものの一例である。

(24) 1. try—2. trying—3. try

(25) 1. fire—2. firing—3. fire

(24)(25)は(22)(23)と全く平行的な関係にあることがわかる。eventive nominal, non-eventive nominal の概念はこのように、転換語(および naked word)にも拡大することができる。以後これら4種類の non-eventive nominal (1. gerund, 2. derived nominal, 3. nouns from verbs, 4. verbs from nouns)を個々に調べてゆく。

3. 1. Gerund

動詞から eventive nominal を作る時には、これら4種のうちのどれも必ず gerund の形式をとらなければならない。gerund に関しては当然であるけれども、eventive nominal と non-eventive nominal が形態上同一である。

1. verb—2. eventive nominal—3. non-eventive nominal の系列は(26)(27)(28)のようになる。

(26) 1. draw—2. drawing—3. drawing

(27) 1. sing—2. singing—3. singing

(28) 1. write—2. writing—3. writing

non-eventive nominal としての drawing は「書いたもの」、singing は「歌」、writing は「書いたもの」という意味になる。なお、この意味における、singing は sing の derived nominal である song と類語であるが、song より意味範囲が微妙に狭いようである。gerund で non-eventive nominal になり得るものは次の(29)のようである。

(29) winning (勝ち得たもの), killing (獲物),

reading (読物), making (製造物), warning

(警告), cutting (切り口)

だいたい次のような場合には gerund は non-eventive nominal にならない。

1. その動詞に対する derived nominal の形が存在

するもの。

2. その動詞に対して、そのままの形で名詞として機能する用法があるもの。(drink など)
3. 自動詞であり、目的語が必要でないもの。(stop, run, go など)

3.2. Derived nominal

gerund の場合と同様、1. verb, 2. eventive nominal, 3. non-eventive nominal の列を作ると(30)(31)(32)のようになる。

- (30) 1. know—2. knowing(+e)—3. knowledge(±e)
- (31) 1. describe—2. describing(+e)—3. description(±e)
- (32) 1. construct — 2. constructing(+e)—3. construction(±e)

derived nominal の non-eventive には(±e)が付加してあるが、この形態は eventive nominal としても用いられることができるということを示している。反対に eventive の列は non-eventive nominal の意味をもつことはできない。故に(30)(31)(32)の例は、それぞれ、know—knowledge—knowledge, describe—description—description, construct—construction—construction と書き換えることができる。

- (33) 1. feed—2. feeding(+e)—3. food(-e)
- (34) 1. speak—2. speaking(+e)—3. speech(-e)
- (35) 1. give—2. giving(+e)—3. gift(-e)

(33)(34)(35) の food, speech, gift が (30)(31)(32) の derived nominal とは少し異なった感じを与えるのは、語形変化が主に母音変化によっているということに加えて、これらが、non-eventive nominalとしてしか使われないからであろう。しかしこの種のものも derived nominal に含めてもよいであろう。この観点からすれば、上述の(36)であげた non-eventive nominal の singing と song の差異は singing が(±e)であるのに対し、song は(-e)であることである。換言すれば sinigng とは異なり、song は「歌うという事実」を意味することができない。この derived nominal の類には、動詞になんらかの語形変化を施して、名詞として使われるものをすべて含める。その他 derived nominal の non-eventive に用いられる例は(36)のようである。

- (36) destruction (破壊物), deed (行為), decision (決定事項), resolution (解決したこと), conclusion (結論), information (情報), belief (信じていること), observation (観察の対象), refusal (拒否する内容), explanation (説明内容), projection (計画), appointment (約束事項), assignment (宿題), assistance

(援助), association (連合したもの), assumption (仮定) ……

この場合次のようなものは non-eventive nominal の用法はない。

1. 自動詞で目的語のないもの (arrival など)

3.3. Nouns from verbs

3.1. で述べた gerund も 3.2. で述べた derived nominal も動詞と名詞の間に語形変化が含まれているが、ここではなんら語形変化しないで、両用に使われ、しかも本来が動詞であるものを扱う。(37)(38)(39)は verb, eventive nominal, non-eventive nominal である。

- (37) buy—buying(+e)—buy(±e)
- (38) drink—drinking(+e)—drink(±e)
- (39) try—trying(+e)—try(±e)

(37)(38)(39)において、eventive nominal はすべて non-eventive の意味を持つことができない。反対に non-eventive nominal は、すべてのものが eventive の意味を持つことができる。non-eventive の用法としては、buy, drink, try はそれぞれ「買った物」、「飲み物」、「試みること」を意味する。(37)(38)(39)の系列はそれぞれ、buy—buy—buy, drink—drink—drink, try—try—tryとも書き換えることができる。(40)は(37)の buy の non-eventive な用法の例である。

- (40) I think it was a good *buy*, don't you?
(Kruisinga)

(41)は try の用例である。

- (41) I know this is my third *try*.

(40)(41)の例はいずれも、eventive な意味とも解釈できる、あいまいな表現である。(37)(39)の buy, try の non-eventive の用法はいくぶん nonce word の性質が強い。換言すれば、辞書にその用例がない時でも、意味に不合理な点がなければ、比較的自由に non-eventive として用いられる、いわば、「生きている品詞転換法」とも言うことができる。

3.4. Verbs from nouns

3.3. で扱ったものとは反対に、本来の名詞がそのまま動詞に転用される場合を考えてみよう。verb—eventive nominal—non-eventive nominal の列を考察する。

- (42) man—manning(+e)—man(-e)
- (43) pencil—penciling(+e)—pencil(-e)
- (44) cap—capping(+e)—cap(-e)

(42)(43)(44)の例から明らかのように、eventive nominal は eventive な意味しか持つことができないし、non-

eventive nominal も non-eventive の意味しか持つことができない。動詞としての man, pencil, cap はそれぞれ「配置する」、「鉛筆で書く」、「キャップをつける」という意味になる。そして nouns from verbs の場合と同様に、これらの意味はほとんど辞書に記されているが、記されていない場合でも、特殊なものについては、完全に定着しているものはのぞいて、意味的にみて基本的なものは相当自由に nonce word 的に用いられる。特殊なものとの基本的なものとの差異については後述する。その他名詞が動詞に転用される例を(45)にあげる。

- (45) face (顔をあわせる), water (水をやる), grass (芝を植える), father (父親になる), card (カードをとる), candle (ろうそくをつける), circle (円を書く), line (線を書く), doctor (治療する), button (ボタンを挿す), pin (ピンでとめる), cake (ケーキを焼く), church (教会に行く) ……

3.3. の nouns from verbs とこの verbs from nouns のどちらにもとれそうなものもある。

- (46) promise, smoke, love, doubt, plant, dress, ……

3.3. と 3.4 で述べた nouns from verbs と verbs from nouns は相当数が多い。つまり英語では名詞と動詞を交互に転用できることが比較的容易である。これは Jespersen(1909—1949) も述べているように、現代英語の屈折語尾消失が主な原因になっていると考えられる。

(51)

	verb	eventive nominal	non-eventive nominal
gerund	write	writing(+e)	writing(-e)
derived nominal	know	knowing(+e)	knowledge(±e)
	give	giving(+e)	gift(-e)
nouns from verbs	buy	buying(+e)	buy(±e)
verbs from nouns	fire	firing(+e)	fire(-e)

[(+e) : eventive, (-e) : non-eventive]

4. Non-eventive nominal と動詞との関係

eventive nominal は動詞との関係でとらえるならば、動詞を含んだものとして考えることができるが、non-eventive nominal は「モノ」を表わすので、その「モノ」が動詞の主語になっている場合と、目的語になっている場合が考えられる。主語でも目的語でもなく、

derived nominal, nouns from verbs, verbs from nouns の3種にわたって問題となる語がある。bath は bathe の名詞形であるので、derived nominal の例である。これを verb — eventive nominal — non-eventive nominal の列を作れば(47)になる。

- (47) bathe—bathing(+e)—bath(±e)

ところが bath はそのまま動詞に転用される場合もあるので nouns from verbs の類になる。

- (48) bath—bathing(+e)—bath(±e)
[æ]

さらに bathe もまた名詞に転用できるので、verbs from nouns の類である。(49)がその例である。

- (49) bathe—bathing(+e)—bath(-e)

それで bath と bathe は複雑な類語関係にあることがわかる。これらの語の差を考えてみることにしよう。

Kruisinga (1932) の(50)が参考になる。

- (50) It makes the reader feel pleasant, rather as one feels after a cosy hot bath than after a bathe in a windy sea.

(50)が示しているように bathe は running water で水浴することを意味し、bath は普通の入浴を意味する。また(50)が示しているように、bath は non-eventive な解釈ができるが、bathe は non-eventive nominal とはなり得ない。以上、4種の non-eventive nominal をまとめると(51)のようになる。

動詞の示す、動作、運動、状態などを表わす場合には eventive nominal である。それで、最も基本的には、本来の動詞が他動詞であり、non-eventive nominal がその目的語になっている場合が多い。これを形式化したのが、(52)である。

- (52) タイプ A

non-eventive nominal(x)=something that

someone verb(x)

53) 54) 55) 56) はそれぞれ gerund, derived nominal, nouns from verbs, verbs from nouns の例である。

53) gerund

writing=something that someone writes

54) derived nominal

knowledge=something that someone knows

55) nouns from verbs

buy=something that someone buys

56) verbs from nouns

cap=something that someone caps

他動詞の目的語に相当する場合には, 53) 54) 55) 56) が示しているように, これら 4 種の nominal にすべて non-eventive nominal の用法が存在する。また 57) のようなタイプ B も存在する。

57) タイプ B

non-eventive nominal(x)=something that someone verb(x) with

57) の場合には, 動詞と助格的な関係になるものであり, verbs from nouns の場合にほとんどあてはまる。

58) pencil = something that someone pencils with verbs from nouns の場合には, タイプ A とタイプ B とも分析できるものが多い。

59) man=something that someone mans (タイプ A)

60) man=something that someone mans with (タイプ B)

61) cap=something that someone caps (タイプ A)

62) cap=something that someone caps with (タイプ B)

このタイプ B は verbs from nouns 以外のものは不可能である。タイプ A の場合は他動詞の目的語に相当するものであることは既に述べたとおりであるが, 他動詞の主語に当たるものは存在するであろうか。結論から先に述べるならば, 存在しない。というのは, 他動詞の主語になるものは行為者である場合が多いが, 行為者を表わす専用の形態が, 英語においては, 存在している。teach に対する teacher, speak に対する speaker あるいは murderer, rider, maker, producer, editor, actor などの -er, -or である。また employ に対する employer と employee, examine に対する, examiner と examinee という対もある。この場合, employee があるので, derived nominal である employment は non-eventive な解釈はできないようである。ただし, examination は non-eventive-nominal であり,

同じ動詞の目的語を表わすといっても, examinee とは異なった意味をもつ。

次に自動詞の場合を調べてみよう。自動詞は目的語がないので, non-eventive nominal になる可能性があるのは主語だけである。他動詞の場合には上述のように主語(行為者)を表わす語尾形態が存在するので, 主語の意味を表わすような non-eventive nominal は存在しなかったが, 自動詞の場合は, 主語が行為者ではない場合があるので, non-eventive nominal が主語の意味になるような場合はあり得る。

63) タイプ C

non-eventive nominal(x) = something that verb(x)

63) のタイプ C の例が, 64) 65) 66) 67) 68) である。

64) flying=something that flies

65) drop=something that drops

66) watch=someone that watches

67) fall=something that falls

68) stream=something that streams

64) 65) 66) 67) 68) はそれぞれ, 「飛行物」, 「落下物(一滴)」, 「みはり人」, 「落下物(滝)」, 「流水物(小川)」の意味をもつ。66) の watch は自動詞の主語の場合であり, 他動詞の時には watcher という語もある。non-eventive の watch は意図を含んでいないようである。64) の flying に対して, fly という non-eventive nominal もある。この場合には, 同じ「飛行物」でも意味が少し特殊化されて, 「ハエ類」を意味する。このタイプ C はあまり多くは見られない。

以上タイプ A, タイプ B, タイプ C について考えてきたが, このいずれのタイプにも属さないで, 元の動詞との関係が複雑なものが多い。gerund, derived nominal, nouns from verbs の類は上記, 3 種のタイプのいずれかに分類できるが, verbs from nouns は, 一考に値する。これに関しては, Jespersen (1909 1949) に詳しく Jespersen を参考にしながら, 以下列記してみる。

69) 異なった意味を持つもの。

stone a man = kill a man by throwing stones, stone cherries = remove the stones from cherries

70) 同じような種類の名詞が異なった関係をもつもの。

father a child = become the father of a child, knight him = make him a knight

71) 名詞の意味する場所に置く

book = enter in a book
corner = place in a corner

72) 名詞の意味する物を取り除く

bone = pull out the bone of

- brain=knock out the brain of
- (73) 名詞の意味する物を使っての行為
 X-ray=treat with X-ray
 axe=cut down with axe
 meat=eat meat
 tea=drink tea
 eye=see with eye
- (74) 名詞の意味する時を費やす
 honey-moon=spend the honey-moon
 winter=spend winter
- (75) 類似の行為を意味する
 sandwich=insert between two things
 dog (fox) =act like dogs (foxes)

(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)の例が示しているように名詞を動詞に転用する時、その動詞は種々の意味を獲得している。しかし、本来の名詞と全く無関係な意味になることはない。一般的には、その名詞の表わす物体（人、動物、体の一部など）から連想される行為、動作を表わす。たとえば stone の場合には、「投げるものとしての石」あるいは、果物の中の石を想像するなら、「(果物から)取り出さなければならぬ石」が連想され、それらから、「投げて～をする」あるいは、「石を取り出す」という意味を持つ。また grandmotherの場合には「子供を甘やかす人」という連想から、「(子供を)甘やかす」という意味の動詞になる。このように、「物」と「その物に関係の深い動作、行為」との関係は、統語的には形式的処理はできない問題である。

4章をまとめてみると次のようになる。タイプA(non-eventive nominal(x)=something that someone

verb(x)) は, gerund, derived nominal, nouns from verbs, verbs from nouns の4種にすべて可能であり、このタイプが基本的なnon-eventive nominalの意味であると言える。タイプ B (non-eventive nominal(x)=something that someone verb(x) with) は verbs from nouns 特有なものであり、タイプC (non-eventive nominal(x)=something that verb(x)) は gerund, nouns from verbs の類のみ可能な、少し特殊なものである。そして特に verbs from nouns の類は、これらどのタイプにも属さない、珍しい意味関係のものが、少ない。

5. 結語

我々は第1章において、gerundの概観に目を通し、まだかつて扱われたことのない用法、non-eventive nominalに着目した。これを従来のnominalと対をなす別のnominalとし、従来のものをeventive nominalとして区別した。第2章において、derived nominalにも、この種のnominalが存在することを認め、第3章において、さらに語形変化しないで、動詞から名詞に転用されるものおよび、名詞から動詞に転用されたものにも、このeventive nominal, non-eventive nominalの関係を見出し、これらにもこの概念を拡大した。第4章において、これらのnominalと動詞との関係を考え、3つのタイプに分類した。さらにその制限を考察した。この3つのタイプとnon-eventive nominalの関係をまとめると(76)になる。

(76)

non-eventive nominal	verb	eventive nominal	non-eventive nominal	タイプ
gerund		+ e	- e	A・C
derived nominal		+ e	± e	A
		+ e	- e	
nouns fom verbs		+ e	± e	A・C
verbs from nouns		+ e	- e	A・B

- (A. non-eventive nominal(x)=something that someone verb(x)
 B. non-eventive nominal(x)=something that someone verb(x) with
 C. non-eventive nominal(x)=something that verb(x))

[+e : eventive / -e : non-eventive]

eventive, non-eventive という新しい目で英語の nominalization を見渡すと、従来、個々に、別々に、考えられていたものが、一つの体系の中で、有機的に関

係していることが明らかになった。本稿では、eventive, non-eventive の方法論の可能性を指摘したつもりである。
昭和52年2月

参 考 文 献

1. Chomsky (1970). "Remarks on nominalization", in *Readings in English Transformational Grammar*.
2. Fraser (1970). "Some remarks on the action nominalization in English", in *Readings in English Transformational Grammar*.
3. Lakoff (1970). *Irregularity in Syntax*.
4. Lees (1960). *The Grammar of English Nominalization*.
5. Jespersen (1909—1949). *A Modern English Grammar on Historical Principles*, 7 vols.
6. Kruisinga (1932). *A Handbook of Presentday English*, 4 vols.
7. Newmeyer (1970). "The derivation of the English action nominalization", in *Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*.
8. Ross (1967). "Constraints on variables in syntax", Ph. D. Dissertation.
9. Thomas (1965). *Transformational Grammar and the Teacher of English*.
10. Thompson (1973). "On the subjectless gerunds in English", in *Foundations of Language*.
11. Wasow and Roeper (1972). "On the subject of gerund", in *Foundations of Language*.
12. 毛利可信 (1962) 『英語意味論研究』
13. 安井 稔 (編) (1971) 『新言語学辞典』
14. 安井 稔 (1973) 「動名詞の解体と再構」『英語学10号』
15. 加藤主税 (1976) 「Eventive Construction考」『愛工大研究報告11号』
16. 加藤主税 (1977) 「Eventive NPと日本語」『中部地区英語教育学会紀要6号』